

現代語訳は三つの確認から

読み方ガイド 1 | 古文を根拠に即して読む

現代語訳では、原文の意味を、今の言葉で自然に伝えます。単語を一つずつ置き換えるだけでは足りません。

語の意味を文脈で決める

対象が風景なら「をかし」は趣がある、幼い子なら「うつくし」はかわいらしい、など場面を手がかりにします。複数の意味を知っていても、本文に合うものを選びます。

誰が何をするかを補う

省略された主語や目的語を必要なだけ補います。補いすぎて、原文にない動機や心情を加えないようにします。会話では話し手と聞き手を先に確認しましょう。

文の働きを保つ

否定・禁止・疑問・推量・願いが訳から消えると意味が変わります。「～ず」は打消し、「な～そ」や文末の「な」は禁止など、前後とセットで読みます。

誤訳しやすい表現を比べる

読み方ガイド 2 | 古文を根拠に即して読む

以下は表現の確認のために作成した教材用作例です。古典作品からの引用ではありません。

読むことと訳すことは別

作例「けふ、友来たらず。」の「けふ」を現代仮名遣いに直すと「きょう」です。文全体を現代語訳すると「今日は、友人が来ない。」となります。

「え」と打消しは不可能を表す

作例「暗くて、え見ず。」は「暗くて、見るができない。」です。単に「見ない」とすると、見ようとしなかったという意味にもなり、能力・状況による不可能が伝わりません。

反語は文脈の結論まで読む

疑問の形で強い否定を示す場合があります。「～だろうか、いや～ない」と訳すと関係が明確です。ただし「や」「か」を見ただけで反語と決めず、前後の内容を確かめます。

書いた訳を原文に戻して点検する

読み方ガイド 3 | 古文を根拠に即して読む

意味が同じであれば、解答例と語順や語尾が異なっても正解です。必要な内容と文の働きをそろえます。

意味のまとまりごとに照合する

短く区切り、原文の各部分が訳のどこに対応するか確かめます。主語・対象・否定・推量・時の前後が入っているか点検しましょう。

分かることと推測を分ける

「～だろう」と人物が考えたことは、確定した事実ではありません。訳にも推量を残します。また、比喻や筆者の評価を、実際に起きた出来事に置き換えないようにします。

この教材の進め方

A～Cは語句から文全体の訳へ進む練習です。Dは8問100点の確認テスト。各話を読み終わったら全文訳でつながり確かめ、意味・主語・文末のどこに誤りがあったかを直します。